

日本科学者会議

2015. 2.10発行

山形支部 つうしん

NO. 207

日本科学者会議山形支部事務局

<http://www.jsa-t.jp/local/yamagata/>

〒990-8560 山形市小白川町1-4-12

山形大学 人文学部 岩田浩太郎 研究室

TEL: 023-628-4269

メール: iwata@human.kj.yamagata-u.ac.jp

学内規則改定で先行する山形大／国策に乗る阪大／執行部が変わる京大と立大 京都での「大学自治」シンポジウムに参加して

松本 邦彦〔人文班〕

今頃の報告で恐縮ですが、学校教育法「改悪」に対応して山形大学での学内規則改定が進んでいた昨秋に、全国の状況を知るべく、京都に送っていただきました。11月15日（土）開催のJSA近畿地区シンポジウム2014「改悪『学校教育法・国立大学法人法』の下における大学自治」（JSA近畿地区協議会主催）です。

シンポジウムでは主に関西の私学を含めた大学の状況をうかがったわけですが、一部の大学を除いて改定案は明確になっておらず、山形大の規則改定作業は日程でも内容面でも全国的先陣を切っているという印象でした。また、阪大、京大、立命館大とそれぞれ対照的な形で日本の先端に行く大学の状況も知り、大変勉強になりました。以下、もっぱら規則改定案と執行部の変動について御報告します。

○ 琉大での規則改定案

学則の改定では、学長は（部局の教授会を介さずに）「必要な授業科目を自ら開設」できるようにしています。（なお、これに似た規定は山大には無かったように思いますが、来年度から小白川三学部の教員組織が一元化されますので、カリキュラムと教授会との関係が注目しなくてはならないようです。）

また、「教授会の議を経て」「教授会の義に基づき」学長が決定するという文言を「教授会の審議を踏まえて」に改めるとのこと。ここは教授会の「意見を聴くものとする」にとどめている山大よりは若干マシかもしれません。

部局長の選考規程については、部局長候補者の推薦制度を導入し、「特に必要な場合は、学長が指名する

者を充てることのできる規程案とする」。山大の改正案では、候補者を教授会から指命、推薦する規定が無いので、けっきょくは同じことになるかもしれませんが、下記の阪大のように当該学部の教授以外も学長が指名okとしているのかどうかは不明です。

○ 国策に乗って走る阪大

阪大では法改正の前から教授会審議事項の骨抜きが進んでいて、二学期制から「三学期制」への移行、「土曜、夜間開講」などの改悪についても審議事項ではなく報告事項としてかけられている状況とのこと。阪大は従来より文科省べったりという評判だそうで、今回の規則改定案も、教授会の審議事項ではありますが、すでに総長（学長）からの「教授会の意見聴取」という形で教授会にかけられている状況です。

その阪大の改正案がすごいのは部局長の決定方法です。「総長が特に必要と認めるときは」「本学の専任の教授」「以外の者も部局長とすることができ」ます。そして、部局の教授会からの候補者は必ず複数出させること（さらに教授会に差し戻させることも可能）、理事からも候補者を推薦させることのできる点などによって、念入りに“学長主導”にしています。

○ 阪大の逆を行くか京大

京大では10月1日に総長（学長）と執行部が一新されました。2013年末からの大運動で、廃止されそうになった意向投票を実施させ、さらに前総長松本紘氏の路線を変更する新総長として山極寿一氏を選び、経営協議会のメンバーも一新したとのこと。

規則改定の日程は、部局長会議に二回報告ののち、

12月に文科省に進捗状況報告、1月部局長会議に最終報告、決定というものです。改定案についての紹介はありませんでした。

○民主派総長が誕生した立命館大

阪大とはまた異なった形でトップダウン経営を突っ走ってきたという立大ですが、こちらはシンプの一週間前の決選投票（11月9日）で、200 vs. 193で民主派の候補・吉田美喜夫教授（労働法）が勝利したそうです。

しかし前経営陣が独断的に進めてきたサッポロビールの跡地を買収しての茨木キャンパス計画で大幅な「財政誤差」が出てきており、学生数増加、人件費カット、奨学金削減などの課題を抱えているとのこと。

○改悪反対で依拠すべきもの

シンポジウムで強調されていたのは、改定の際に依拠すべきものとして「大学憲章」と、その普及運動で

す。また、改正法の「付帯決議」や日本国憲法の規定も重要だとも。「人材」が流行語だが、こんな言葉は法律には出てこないと強調されていた先生がおられました。山大でも憲章案までは作成できていたのですが、その普及が進まないまま、事態が進んでしまったのは反省すべき点と感じました。

また、阪大のモンゴル語の先生が言われていましたが、今はとにかく忙しくて闘いどころではなく、年一回の組合の飲み会にもイヤイヤ出るような状況なので、まずはコミュニティーの再生から、癒しを与える場づくりから始めるべきだということも、初心に返って必要な段階なのでしょう。秘密保護法反対の集会には三人しか来なかったけれど、来年（2015年）の干支の羊のマスコット作りには30人の参加があったということです。

東北地区シンポジウム参加記

岩田 浩太郎〔人文班〕

日本科学者会議東北6支部の主催により、2014年11月29日に東北大学金属材料研究所において「大学は今―学校教育法・国立大学法人法と大学の現状―」が開かれた。東北の各国立大学教職員組合の多くも協賛した。学校教育法改正にともなう各大学の学内規則の改定作業を文科省より迫られていることへの対応を検討することを目的とした。

はじめに、伊藤宏之氏（全国常任幹事）による「全国の大学の現状調査取り組み状況について」、及び武井隆明氏（全国常任幹事）による「岩手大学の取り組みから」の報告がなされた。このシンプの時点では、全国的にまだ具体的な学内規則改定案が提案されているところは少なく、学校教育法改正の内容への批判が主に論じられた。武田氏はユネスコの高等教育政策に関する勧告や宣言などが政府への抗議の拠り所となると強調されたが、後の議論で私から、山形大学で10月30日に開催された文科省の説明会で北岡大学振興課課長補佐が文科省としては各国の高等教育政策を規

律する国際的な取り決めや合意はないと認識していると答弁していたことを紹介して、対応策につき注意を喚起した。

休憩の後、総合討論「大学の課題と取り組むべき方向」がおこなわれた。まず、東北6県の各国立大学の状況につき各支部事務局長などにより報告がおこなわれた。私からは、全国でも先駆けて学内規則案改訂を11月評議会で決定してしまった山形大学の議論の経緯と改訂内容の問題点につき、前学長時代からのトップダウン化の過程も含めて報告した。秋田大学からは先の国際資源学部への改組を契機に、教授会とは別に教育研究 Council と学部運営 Council を設け、学部運営の各局面をこれらの Council で決定し推進していく制度設計が進められていることが報告された。これらの各 Council の委員の半数は学外委員とされ、学外委員は民間企業や連携大学から選任されるのであり、学部レベルの諸決定権に関しても学部構成員の手が届かないものとなりつつある危険な状況が指摘された。山

形大学では学部内規則の改訂はこれからであり、学部構成員の発言権や決定への参加権を可能な限り守る取り組みが求められると強く感じた。

最後に、声明「安倍政権の高等教育政策と改正学校教育法等にもとづく各大学の学内規則改正に対する声明（案）」を採択した（日本科学者会議全国HPに掲載されている）。この声明は、求められて私が準備し

たものである。『山形支部つうしん』号外（2014年9月30日）で発表した声明内容のうち山形大学に個別に関わる部分を削除したものであり、全国的な情勢認識や政策動向に対する批判は同様である。

声明採択後、今後の運動につき意見交換をした。国民へのアピールが大切であり、マスコミなどを通じたわかりやすい働きかけを更に検討することが話し合われた。

第3回支部例会参加記

西岡 斉治〔理学班〕

2014年12月20日（土）、第3回支部例会が山形大学小白川キャンパスにおいて開催されました。講師は加藤静吾氏（山形大学名誉教授）で、ご自身の「ソーラーシェアリングによる手作り太陽光発電所」についてお話しくささいました。

この発電所は農地の上にサイズ120センチ×54センチの細長いパネルを120枚設置したもので、間隔を適度に空けて農作物にも光が行き渡るように配慮されています。多くの植物には光飽和点（生化）という、光合成が増加しなくなる太陽光の限界量があるさうで、光飽和点を越える光エネルギーを発電に利用しようというアイデアです。このソーラーシェアリングは長島彬氏によって考案・実証されたものとのことでした。

講演は、まずエネルギー資源の限度の説明から始まりました。石油・天然ガスは数10年、原子力（U235）、石炭は100年で、「夢」の高速増殖炉（U238）と核融合はそれぞれ1万年と1500万年。これらを「再生不可能エネルギー」と呼んで、太陽の寿命が限度の太陽エネルギーと対比しました。1950年台～60年台には発電のほとんどは再生可能エネルギーの水力だったさうです。その後、発電量は増加を続けますが、省エネや節電の影響でピークはもはや過ぎていることをグラフを用いて説明されました。

太陽光発電といえば最近メディアでも大きく取り上げられた接続保留問題にも触れられました。実態は、

設備認定された太陽光発電所の総出力が申請の駆け込みで大きくなってしまった（約7,000万kW）というさうことで、運転開始率が1割弱であるため実際に設備が完成し稼働している太陽光発電所の総出力はグラフでは約1,000万kWになっていました。また、認定出力自体も今は取り消しで下がっているのではないかということでした。設備を作っていない段階でも認定がもらえるらしいのですが、認定後一定期間内に稼働を開始できなかつたものは認定を取り消されるさうです。それでも日本の太陽光による発電量は2013年に世界第4位にまでなっています。1位のドイツは日本の倍以上ですから、さらに増やしていけるものと期待しています。

ただ、太陽光発電を増やすことに対しては「原発1台分の発電を太陽光発電で行うには山手線の内側の広さの土地が必要」という批判があり、実際、日本1位のメガソーラーは世界で見ると23位にまで後退してしまうとのことでした。この土地の問題への解答としては建物に設置する方法があり、山形大学工学部でも壁面に直接設置する方法で運用しています。そして農地を利用するソーラーシェアリングはもう一つの解答になるというわけです。日本の農地の4分の1で実行すれば全原発の発電量を達成できるまでになるさうです。

ソーラーシェアリングの説明では、農地の上に十分な高さで細長いソーラーパネルを並べて設置するため耕作を続けつつ発電できること、工夫すればほとんど

一人で組み立てられること、等々の特徴が挙げられました。実際の作業の写真や図面を見せてくださいましたが、農作業をしている人には難しくない作業なのだろう、という印象でした。

面白かったのは雪国山形ならではの雪対策で、特にパネルの上に積もってしまった雪をどう落とすかという話です。パネルの上を雪が覆ってしまっただけで発電できませんが、雪を落とす労力や費用と発電量とは秤にかけする必要があります。有効なものとして紹介されたのは、パネルの縁の段差を透明テープを貼ってなだらかにすることで引っかかりを少なくし、雪が滑り落ちやすくする方法でした。透明テープは100円ショッ

プで購入できる66メートル100円のものなので、費用対効果に優れます。有効でないものとしては、車のフロントガラスに使う撥水スプレーが挙げられました。実験により、ある程度暖かい時には効果がある一方、寒くなるとむしろ逆効果になるという結論でした。スプレーは高いこともあり、使用をやめたそうです。講演後の質問には、経済性を考えると冬はある程度あきらめて夏の発電量を重視すると良いというような趣旨のお答えをされていました。

講演後の質問時間では、山形県が提唱する「卒原発」をどのように実現するかについて、LNGや燃料電池の性質も踏まえた意見交換が行われました。

<班例会開催報告@鶴岡班>

鶴岡班の片平です。鶴岡班では、12月2日18:00～班例会を実施しましたので報告します。参加者は9名でした。班例会では農学部内の動き、大学改革問題、国内外の問題について軽食をとりながら意見交換しました。話し合われた内容としては、学部内の動向、大学改革問題を中心としたものでした。議論が深まり、遅くまで活発な議論が展開されました。鶴岡班では、今後も班例会を積極的に行い、会員相互の交流と拡大に取り組んでいきたいと考えています。以上、報告まで。

<日本科学者会議創立50周年記念行事>

国際シンポジウム「移行：原子力から再生可能エネルギーへ」のご案内

日本科学者会議は1965年12月4日に創立されました（日本科学者会議編『現代社会と科学者 日本科学者会議の15年』大月書店、1980年、66ページ）。ことしは創立50周年となる記念すべき年です。それを記念して、きたる3月27日（金）から29日（日）まで、横浜国立大学を会場に、標記のテーマで国際シンポジウムが開催されます。

日本科学者会議は、一貫して原発安全神話とたたかい、福島原発事故以降は「原発とわれわれは共存できない」との立場から、原発の廃止を求める国民的運動と連帯しています。今回は、原発の廃止と再生可能エネルギーの普及で欧米において先進的な経験をもつ「地球的责任のための技術者・科学者国際ネットワーク」(The International Network of Engineers and Scientists for Global Responsibility, INES)との共催で、INESからも複数の報告者を含む会員が出席するとのことです。

この国際シンポジウムを通じて、原発を廃止し、エネルギー構造を根本的に転換させるための取り組みが前進することが期待されます。山形支部のみなさまも、ぜひ会内外の方とお誘いあって、参加されますよう訴えたいと思います。賛同・支持募金も募集中だそうです。

詳細については、会誌2月号付録として配付されている2nd Circular（「科学者会議国際シンポ」で検索）をご参照ください。
(栗野/米沢班)